

幼児に読んで
聞かせるお話

仲よし子兔さんのお話

五八

武田雪夫

さあ、これは、仲よし子兔さんのお話ですよ。

あるところに、お母さん兔と、子兔さんがいました。子兔さんは、一ぴき、二ひき、三ひき、四ひき、五ひき、みんなで五ひきおりました。みんな赤いお目々をした、まつ白な、かはいかはい子兔さんです。

まあまあ、今日は、よいお天気です。母さん兔はお出かけです。

お母さんは、五ひきの子兔さんを、大きな乳母車の中へ、一しよに入れました。

さあさあ、町の市場へお買物に行きませう。

町へ行くには、ひろい、野原を通るのです。

野原には、きれいなお花が咲いてをりました。赤いお花が、一めんに咲いてをりました。

一ぴきの子兔さんは、その赤いお花を見るに、すぐに大きな聲で言ひました。

「お母さん、あの赤いお花を、こつて。」
するに、ほかの小兔さんも、みんな、

「あのお花をこつて。」あのお花をこつて。
こ大きわぎです。

まあまあ、仲よし子兔さん。

お母さんは、すぐに赤いお花をこりました。一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、みんなでも五つ、赤いお花をこりました。

子兔さんは、一つづつ、赤いお花を持つてにここに、ここに。まあまあ、ほんまに仲よし子兔さん。

兔のお母さんは、乳母車をガラガラおして、町の中へ入つて行きます。むかふの力で、誰かゴム風船を賣つてをりました。

一ぴきの子兔さんは、それを見つけるに、すぐに、大きな聲で言ひました。

「お母さん、ゴム風船を買つてよ。」

さうするに、ほかの子兔さんも、みんな

「風船を買つて。」風船を買つて。こ大きわぎです。
まあまあ、仲よし子兔さん。

風船を賣つてゐたのは、豚の小母さんでした。お母さん
兎は、

「豚の小母さん、風船を下さいな。」と言ひました。
するに豚の小母さんは、

「はいはい、おいくつ上げませうか。」と言ひました。

お母さん兎は、

「あの、五つ下さいな。」

さう言つて、風船を五つ買ひました。子兎さんは一つづつ
風船を持つてにここに、ここに。

まあまあ、ほんきに仲よし子兎さん。

お母さん兎は、犬のお店へ行つて、お買物をしました。

「まあまあ、それを十錢下さいな。それから、これも十錢
下さいな。」

それから、あちらこちらのお店へ行つて、色々なお買物
を、きつかりしました。

さあ、それではお家へ歸りませう。

お母さん兎は、大いそぎです。五ひきの子兎さんご、お
買物で一ぱいになつた乳母車を、きんさんおして行きまし
た。

道のまん中に、大きな石がありました。でもお母さん兎
は、少しも氣が付きません。

あれ、乳母車の輪が、その石の上に、のり上げました。

ゴットン!

乳母車が、ゆれた拍子に、子兎さんたちは、手に持つて
ゐた風船を、ぱっぴーしよに、はなしてしまひました。

そして、みんなしよに、

「ああ、風船が、ごんだあ。」風船が、ごんだあ。」と、大
きな聲で泣き出してしまひました。

するに、その聲を聞いて、そこへ飛んで來たのは、ちや
うご五羽の鳩さんたちでありました。

鳩さんたちは、

「さうしたのです。ああ、さうですか。大丈夫ですよ。

すぐに、きつて來て上げますよ。」

さう言つて、バタバタバタと、大いそぎでさび立つて行
きました。

風船は、風に吹かれて、ごんごん高く高く、空へ上つて
行きます。

さあ、鳩さんたちは、うまく風船に追ひつけるでせう
か。バタバタ、バタバタ、風船を追ひかけて、ずんずん飛
んで行きます。

しばらくするに、バタバタバタと、鳩さんたちは、元氣
な羽ばたきをさせながら、かへつて來ました。

ああ、鳩さんたちは、みんな一つづつ、風船の糸を、お
口にくはへてゐます。

そして、鳩さんたちは、

「はい、こんきは、しつかり持つていらつしやいよ。」

「お手手を、はなしてはだめですよ。」

さう言つて、風船を一つづつ、小兎さんの手に持たせてくれました。

お母さん兎は、

「鳩さん、さうも、ほんまにありがたう。」と、お禮を言ひました。

するさ、小兎さんたちは、一つづつのお手々に風船を持つて、にこにこしながら、

「鳩さん、さうも、ありがたう。」

「さう言つて、お禮を言ひました。」

まあまあ、ほんまに仲よし子兎さん。そして、ほんまに

お利口な子兎さんです。

では、仲よし子兎さんのお話は、これでおしまひです。

× × ×

(六七頁より)

そして糊の乾かない中に、卵の殻の適當な色のついたのを其の上のせ、指でつぶして付けます。卵の殻がかけるので餘分なのが出來ますから、それは箱をはたいてはらひ落します。糊の付いた所にだけ、卵の殻で繪が出來ます。箱の上に紐をつけて下げます。卵の殻の艶ミ、モザイク式の面白さがあつて、中々興味ある物になります。

(八六頁より)

この人形の整列する有様を見せたかつたので無理にこの場面をつけ加へた形なのです。無くともいゝと思ひます。

第五場

戦場の場面を音で現はして見ました。悽絶な場面を見せることなく、見てゐていゝものださうでした。

第六場

こゝはしんみりした場面です。子供の様子によつては、しんみりを見て貰へない場合もあります。情味豊かな懐古話をよく聞いて貰ひ度いと思ひます。それには、この場面が冗漫に過ぎぬやうに注意することが大事です。